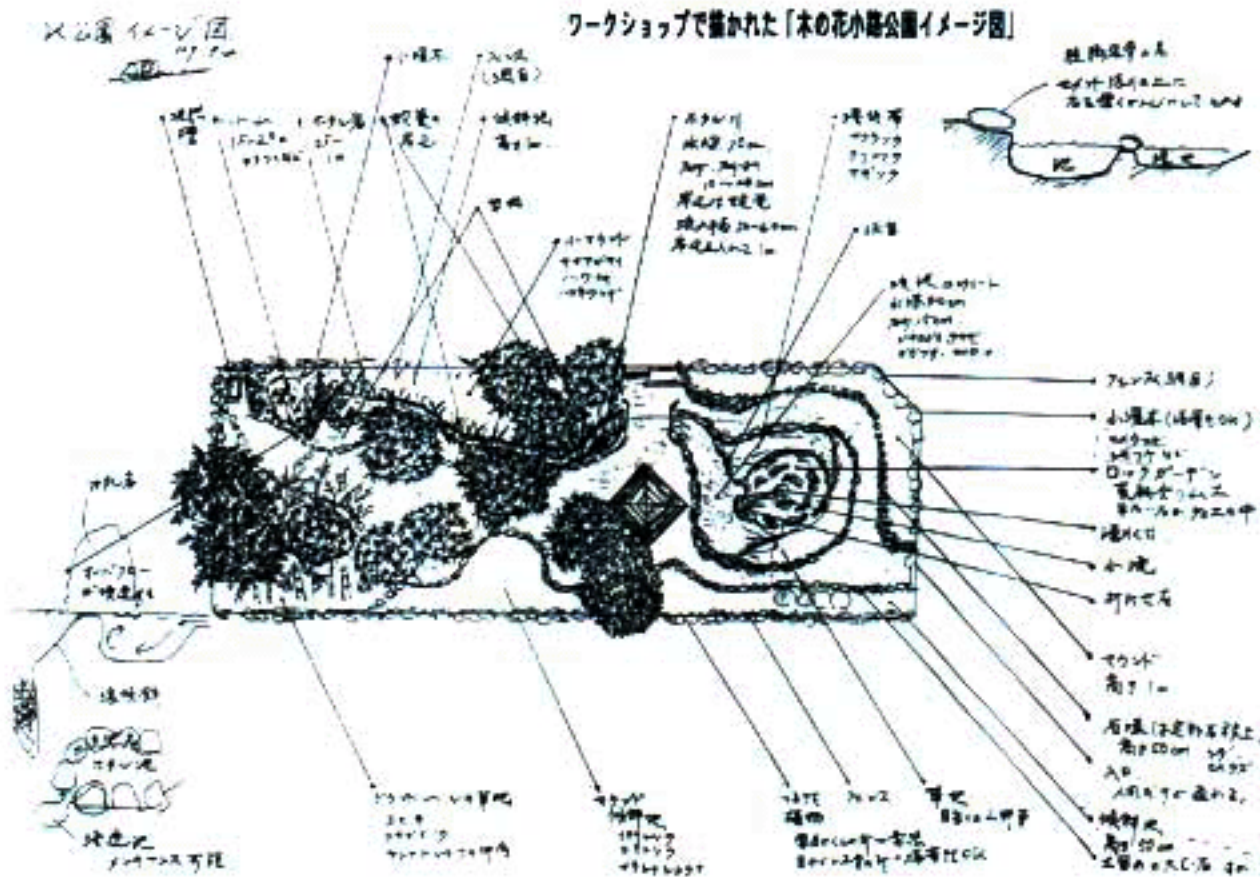


ワークショップで描かれた「木の花小路公園イメージ図」



住民の一人が描いた「凝縮された里山」のイメージ図が採用され、公園の設計が行われた。
(提供：武蔵野市緑化公園課)

●地域本来の生物相の復元

生きものと共生する地域づくりを進める場合、気をつけなければならないことのひとつに、自然環境や野生生物がもっている「地域特性」を損なわないということがあります。武蔵野市であれば、その名のとおり武蔵野の風景を代表する雑木林やそれを形成する個々の植物、そして植物を糧として生きるチョウや野鳥をはじめとした動物相が、地域の自然条件と人々の営みによって形づくられてきた地域特性といえます。

したがって、植物を植栽する際には、ワークショップで決められたように、地域に元来自生する種類を選び、外来種や園芸品種を持ち込まないことが、地域特性を守り育むことにつながります。また、地域の在来植物と同じ種類であっても、その株や種子が他の地域から運ばれたものであれば、遺伝子レベルでは地域特性を損なうことになるため、最近ではそうした点にも配慮が求められています。

●木の花小路公園に植栽した樹種

植栽に関しては、地域特性や野鳥や昆虫の生育に配慮し、地域に元来自生する樹種を中心に選定されています。

1) 高木

(既存樹木) シラカシ3 ムクノキ2 イヌシデ1 アカマツ9
コナラ1 エノキ3 ケヤキ1など計21本

(新植樹木) トチノキ1 クヌギ5 コナラ5 クリ1 カシワ1
ヤマボウシ2 ヤマモミジ1 ハシバミ1 クロモジ2
など計20本

2) 中低木

(新植樹木) サンショウ2 ニシキギ1 リョウブ1 ガマズミ3
ヤマアジサイ40 ミツバツツジ3 シロヤマブキ6
ハコネウツギ5 アセビ72 ハナイカダ10など計431本

3) 山野草

90種類

4) 地被類

サネカズラ36 テイカズラ72 ミツバアケビ27
ツルアジサイ45など計180株

●生物群集全体を復元する重要性

ホタルの幼虫を放流して光の乱舞を再現することが、かつて各地で行われました。放流後の1・2年間は、確かにたくさんのホタルが発生します。しかし、その後は激減することがほとんどです。その原因はたくさんのホタルの幼虫が、餌のカワニナを食べ尽くしたために餌不足に陥るからです。ホタルの発生を維持するには、毎年カワニナを与えるか、幼虫を食べるトンボのヤゴなどを導入してホタルの増えすぎを制限しなければなりません。餌のカワニナを与えるのであれば養殖と変わりません。ヤゴの導入も次の段階でヤゴの増えすぎを抑えるために魚を入れる必要が生じ、さらには魚の数を一定にするためにサギやカワセミが必要になります。ホタルを復元するにはホタルを含めた生物群集を復元しなければならないのです。そのためには、自然自身の回復力を待ち、時間をかけることが大切です。